女体

芥川龍之介

楊某と云う支那人が、ある夏の夜、あまり蒸暑いのに眼がさめて、頬杖をつきながら腹んばいになって、とりとめのない妄想に耽っていると、ふと一匹の虱が寝床の縁を這っているのに気がついた。部屋の中にともした、うす暗い灯の光で、虱は小さな背中を銀の粉のように光らせながら、隣に寝ている細君の肩を目がけて、もずもず這って行くらしい。細君は、裸のまま、さっきから楊の方へ顔を向けて、安らかな寝息を立てているのである。

楊は、その虱ののろくさい歩みを眺めながら、こんな虫の世界はどんなだろうと思った。自分が二足か三

足で行ける所も、虱には一時間もかからなければ、歩けない。しかもその歩きまわる所が、せいぜい寝床の上だけである。自分も虱に生れたら、さぞ退屈だった事であろう。……

　そんな事を漫然と考えている中に、楊の意識は次第に朧（おぼろ）げになって来た。勿論夢ではない。そうかと云ってまた、現（うつつ）でもない。ただ、妙に恍惚たる心もちの底へ、沈むともなく沈んで行くのである。それがやがて、はっと眼がさめたような気に帰ったと思うと、いつか楊の魂はあの虱の体へはいって、汗臭い寝床の上を、蠕々然（ぜんぜんぜん）として歩いている。楊は余りに事が意外

なので、思わず茫然と立ちすくんだ。が、彼を驚かしたのは、独りそればかりではない。――

彼の行く手には、一座の高い山があった。それがまた自ら（おのずか）らな円（まる）みを暖く抱いて、眼のとどかない上の方から、眼の先の寝床の上まで、大きな鍾乳石（しょうにゅうせき）のように垂れ下っている。その寝床についている部分は、中に火気を蔵しているかと思うほど、うす赤い柘榴（ざくろ）の実の形を造っているが、そこを除いては、山一円、どこを見ても白くない所はない。その白さがまた、凝脂（ぎょうし）のような柔らかみのある、滑（なめら）かな色の白さで、山腹のなだらかなくぼみでさえ、丁度雪にさす月の光のような、

かすかに青い影を湛(たた)えているだけである。まして光をうけている部分は、融けるような鼈甲色(べっこういろ)の光沢を帯びて、どこの山脈にも見られない、美しい弓なりの曲線を、遥(はるか)な天際に描(えが)いている。……

楊(よう)は驚嘆の眼を見開いて、この美しい山の姿を眺めた。が、その山が彼の細君の乳の一つだと云う事を知った時に、彼の驚きは果してどれくらいだった事であろう。彼は、愛も憎(にくし)みも、乃至(ないし)また性欲も忘れて、この象牙(ぞうげ)の山のような、巨大な乳房(ちぶさ)を見守った。そうして、驚嘆の余り、寝床の汗臭い匂(におい)も忘れたのか、いつまでも凝固(こりかた)まったように動かなかった。——楊は、

虱になって始めて、細君の肉体の美しさを、如実に観ずる事が出来たのである。

しかし、芸術の士にとって、虱の如く見る可きものは、独り女体(にょたい)の美しさばかりではない。

（大正六年九月）

底本：「芥川龍之介全集２」ちくま文庫、筑摩書房
１９８６（昭和61）年10月28日第１刷発行
１９９６（平成８）年７月15日第11刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：earthian
１９９８年12月28日公開
２００４年３月９日修正